

チカメタカサゴ *Pinjalo pinjalo* の日本における 成魚 2 個体目の記録

小枝圭太・本村浩之

〒 890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館

はじめに

フエダイ科セダカタカサゴ属 *Pinjalo* は背鰭基底部に鱗に覆われる部分があること、鋤骨に歯帯があること、第 1 鰓弓の下枝鰓耙数が 20 以下であること、背鰭が 11-12 棘かつ 13-15 軟条であること、目の中心がほぼ体軸上にあること、側線下方の鱗列が斜め上後方へ向かうこと、および牙状の歯をもたないことなどの特徴をもつ (Allen, 1985). インド・太平洋のセダカタカサゴ属は、Randall et al. (1987) により、セダカタカサゴ *P. lewisi* Randall, Allen and Anderson, 1987 とチカメタカサゴ *P. pinjalo* (Bleeker, 1845) の 2 種に整理され、日本からもこの 2 種が知られている (島田, 2013).

チカメタカサゴはこれまで国内において、石垣島から得られた稚魚と鹿児島県佐多岬沖から得られた成魚 1 個体のみが報告されている (金城・仲本, 1995; 岩槻ほか, 2004; 島田, 2013). 2015 年 3 月 28 日に鹿児島県薩摩半島の開聞川尻沖で 1 個体のチカメタカサゴが採集された. 本標本は鹿児島県ならびに日本における本種成魚の標本に基づく 2 例目の記録であり、薩摩半島からの初めての記録となるため、ここに報告する.

Koeda, K. and H. Motomura. 2015. Second Japanese record of adult *Pinjalo pinjalo* (Perciformes: Lutjanidae) from the Satsuma Peninsula, Kagoshima, Japan. *Nature of Kagoshima* 41: 107-110.

✉ KK: the Kagoshima University Museum, 1-21-30 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan (e-mail: hatampo@gmail.com).

材料と方法

計数・計測部位は Randall et al. (1987) にしたがった. 標準体長は体長と表記し、デジタルノギスを用いて 0.1 mm までおこなった. チカメタカサゴの生鮮時の体色の記載は、固定前に撮影された薩摩半島産の 1 標本 (KAUM-I. 70693) のカラー写真に基づく. 標本の作製、登録、撮影、固定方法は本村 (2009) に準拠した. 本報告に用いた標本は、鹿児島大学総合研究博物館に保管されており、上記の生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている. 本報告中で用いられている研究機関略号は、KAUM ー鹿児島大学総合研究博物館と MUFUS ー宮崎大学農学部海洋生物環境学科.

結果と考察

Pinjalo pinjalo (Bleeker, 1845)

チカメタカサゴ (Fig. 1)

標本 KAUM-I. 70693, 体長 339.9 mm, 尾叉長 400.0 mm, 鹿児島県指宿市開聞川尻沖 (31°10'N, 130°32'E; 鹿児島市中央卸売市場魚類市場にて購入), 2015 年 3 月 28 日, 定置網, 水深 0-40 m, 牛嶋洋介.

記載 背鰭棘数 11; 背鰭軟条数 14; 臀鰭棘数 3; 臀鰭軟条数 10; 胸鰭軟条数 18; 側線有孔鱗数 48; 背鰭起部下における側線上方鱗数 9; 側線下方鱗数 19; 背鰭前方鱗数 17; 尾柄鱗数 26; 上枝鰓耙数 7; 下枝鰓耙数 16.

体各部測定値の標準体長に対する割合 (%): 体高 41.9; 体幅 17.7; 頭長 28.6; 吻長 8.8; 眼窩径 6.8; 両眼間隔 9.9; 上顎長 9.3; 眼窩下縁から



Fig. 1. Fresh specimen of *Pinjalo pinjalo*. KAUM-I. 70693, 339.9 mm standard length, off Kaimonkawajiri, Satsuma Peninsula, Kagoshima Prefecture, Japan.

眼窩骨下縁までの長さ 2.6；尾柄高 11.7；尾柄長 16.8；背鰭前長 36.7；臀鰭前長 69.2；腹鰭前長 37.3；背鰭基底長 57.4；背鰭第 1 棘長 7.4；背鰭第 2 棘長 11.4；背鰭最長棘長 16.3；背鰭最後棘長 10.1；背鰭最長軟条長 10.7；臀鰭基底長 18.5；臀鰭第 1 棘長 2.6；臀鰭第 2 棘長 11.6；臀鰭第 3 棘長 11.3；臀鰭最長軟条長 12.5；尾鰭長 25.2；胸鰭長 25.1；腹鰭棘長 12.8；腹鰭長 17.6。

体はやや長い楕円形でよく側扁する。体高は背鰭第 5 棘起部で最大となり体長は体高の約 2.4 倍。吻端から背鰭起部までの背縁はゆるやかに湾曲し、両眼間隔は突出する。背縁と腹縁の膨らみは正中線に対してほぼ同じで、背縁腹縁ともに尾柄までゆるやかに湾曲する。目は小さく、中心はほぼ体軸上にある。鼻孔には皮弁はなく、前後鼻孔ともに開孔部がやや側扁する。口裂は小さく、唇は薄い。主上顎骨後端は眼の前縁の直下に位置する。両顎に微細な円錐歯を 1 列もつが、牙状の歯をもたない。鋤骨に歯はあるが、舌骨上にはない。鰓蓋後縁は胸鰭起部の直上。鰓蓋および前鰓蓋骨の後縁は円滑で、鰓蓋上端は眼を大きく超え、前鰓蓋骨上端が目の上縁の真横に達する。側線は鰓蓋上方から始まり、背縁と並行にゆるやかに湾曲して尾柄に達する。

胸鰭起部は主上顎骨下端のほぼ真横で、胸鰭基底後端は背鰭起部直下に位置する。胸鰭後端は尖り、背鰭第 8 棘起部直下に達するが、総排泄孔直上には達しない。背鰭起部は腹鰭起部直上のわずか前方に位置し、背鰭第 11 棘（最後棘）起部は総排泄孔の直上に位置する。背鰭基底後端は臀鰭基底後端直上より後方に位置する。背鰭棘は第 3 棘が最長。腹鰭起部は胸鰭基底後端および背鰭起部直下よりやや後方に位置し、基底後端は背鰭第 4 棘起部直下に位置する。たまた腹鰭は胸鰭後端のほぼ直下で、総排泄孔には達しない。臀鰭起部は背鰭第 3 軟条起部直下に位置し、後端は背鰭第 13 軟条起部直下に位置する。背鰭、腹鰭および臀鰭の軟条のうち、背鰭第 1 軟条のみ不分枝。尾鰭は二叉型で湾入し、上下葉ともに尖る。上葉より下葉が長い、上葉の後端には欠損と考えられる欠刻がみられる。

頬部および鰓蓋上に鱗を有するが、前鰓蓋骨下部、眼前域、眼上域は広く無鱗。側線上方の鱗列は斜め上後方へ直線的に向かう。側線下方の鱗列は斜め上後方へ波打ちながら向かう。背鰭基底部の 1/3 および臀鰭基底部の 1/2 は微小な鱗に覆われる。

色彩 生鮮時の色彩 — 頭部と体側の地色は桃

色で、上部で濃く、下部で淡い。体側の中央から上部には、鱗列の中央を走る淡黄色の斜走線があり、これらは鱗列に沿って斜め上後方へ向かう。背鰭基底部および棘部の縁辺は山吹色で、棘部の中央部および軟状部の基底部以外は桃色。臀鰭の棘部は黄色で、軟状部に向かって徐々に淡い桃色を呈する。胸鰭は一樣に半透明な赤色。腹鰭の軟条は黄色で、鰭膜は山吹色。尾鰭は一樣に赤色で、後縁中央部のみ淡い黒色。尾柄部後部に鞍状の非常に淡い黒色斑を有する。光彩は鮮紅色で、上縁は黄色。

分布 オマーン湾以東のインド洋および西太平洋に広く分布し、太平洋ではパプアニューギニア、インドネシア、シンガポール、マレーシア、フィリピン、香港、台湾、および日本に分布する (Randall et al., 1987; Randall and Lim, 2000; 岩槻ほか, 2004; 島田, 2013)。日本国内では、沖縄県石垣島と鹿児島県大隅半島 (金城・仲本, 1995; 岩槻ほか, 2004; 島田, 2013)、および鹿児島県薩摩半島 (本研究) から記録されている。

備考 鹿児島県薩摩半島産の標本は、背鰭基底部の 1/3 が小鱗に覆われること、鋤骨に歯帯があること、第 1 鰓弓の下枝鰓耙数が 17 であること、目の中心がほぼ体軸上にあること、側線下方の鱗列が斜め上後方へ向かうこと、牙状の歯をもたないことなどの特徴から、Allen (1985) が定義した *Pinjalo* 属と同定された。また、背鰭が 11 棘 15 軟条であること、臀鰭が 3 棘 10 軟条であること、尾鰭の湾入が浅いこと、鮮時に腹鰭と臀鰭が黄色を呈すること、および側線上方に鱗列に沿う右上がりの斜走線があることは、Allen (1985)、Randall et al. (1987) および島田 (2013) が報告した *P. pinjalo* の標徴とよく一致した。

チカメタカサゴ *P. pinjalo* は、同属の有効種であるセダカタカサゴ *P. lewisi* と比較して、背鰭が 11 棘 14-15 軟条であること (セダカタカサゴでは 12 棘 13 軟条)、臀鰭軟条数が 9-10 であること (8-9)、尾鰭が強く湾入すること (弱く湾入する)、および体側中央から背部に鱗列に沿う右上がりの斜走線があること (斜走線がない) から容易に識別される (Randall et al., 1987; 岩槻ほか, 2004;

島田, 2013)。

本種は、久新ほか (1982) により、日本水域外の南シナ海で採集された標本に基づき和名チカメタカサゴが与えられている。金城・仲本 (1995) は、石垣島から得られた本種の稚魚に関する口頭発表をおこなった (1995 年度日本魚類学会講演要旨: 39 頁)。その後、岩槻ほか (2004) は佐多岬から得られた本種個体 (MUFs 22234, 体長 420 mm) を、成魚の標本に基づく初めての記録とした。また、彼らは沖縄県石垣島川平湾石崎沖の水深 60-70 m で採集された個体を沖縄県本部町の沖縄美ら海水族館が飼育していたことに触れているが、この個体の現在の所在については不明である。したがって、本報告の薩摩半島から得られた調査標本は、日本における本種成魚の標本に基づく 2 例目の記録となると同時に、薩摩半島からの初めての記録となる。

生態学的知見 Allen (1985) は、チカメタカサゴとセダカタカサゴの生息域をともに水深約 60 m の岩礁域とし、インド洋から西太平洋にわたる両種の分布域にはほとんど違いがみられないことを示した。しかし、沖縄県においては、セダカタカサゴが“アカシチュー”の地方名で呼称されることが知られているほど少量ながらも漁獲される種である (具志堅, 1972; 赤崎, 1984; 新垣・吉野, 1984)。一方でチカメタカサゴの報告例は、金城・仲本 (1995) が口頭発表した石垣島で採集された稚魚に限られる。具志堅 (1972) と新垣・吉野 (1984) は、沖縄県で漁獲されるセダカタカサゴをマチ漁 (深海に生息するハマダイ属を対象とした深海一本釣り漁業) で漁獲される種として扱い、その漁獲水深を 100-200 m としている。しかし、本研究と岩槻ほか (2004) においてチカメタカサゴが採集された定置網は、それぞれ水深 40 m 以浅と水深 31 m 以浅と浅く、海岸から沖へ 1 km 未満の沿岸浅海域であった。このことは、セダカタカサゴ属を構成する 2 種のうちセダカタカサゴが深めの水深帯、チカメタカサゴが浅めの水深帯とやや異なる環境に生息している可能性を示唆している。久新ほか (1982) は、セダカタカサゴが南シナ海の海洋島周辺や沖合でのみ釣獲さ

れ、チカメタカサゴはトロールで漁獲されるとしている。これに対し Randall et al. (1987) は、オマーン近海の大陸棚上においてもセダカタカサゴが採集されていることを指摘し、海洋島周辺にのみ分布する可能性については否定している。ただし、これら2種が異なる漁法で採集されたことは、両種の生息環境が異なる可能性を支持する結果といえる。今後、これら2種が採集された場所や手法、水深などの知見を集積し、生息場所の違いについて検討する必要がある。

■ 謝辞

本報告を取りまとめるにあたり、標本の採集に関して、牛嶋洋介氏（合同会社 生鮮調達）に多大なるご協力をいただいた。鹿児島大学博物館魚類分類学研究室の吉田朋弘氏には、本原稿に対し適切な助言を数多く頂いた。また、標本の作成・登録作業などを手伝ってくださった原口百合子氏をはじめとする鹿児島大学総合研究博物館ボランティアの皆さまと同博物館魚類分類学研究室の皆さまに厚く御礼を申し上げる。本研究は、鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島県産魚類の多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は JSPS 研究奨励費 (PD: 26-477), JSPS 科 研 費 (19770067, 23580259, 24370041, 26241027, 26450265), JSPS アジア研究教育拠点事業「東南アジアにおける沿岸海洋学の研究教育ネットワーク構築」、総合地球環境学研究所「東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティーの向上プロジェクト」、国立科学博物館「日本の生物多様性ホットスポットの構造に関する研究プロジェクト」、文部科学省特別経費—地域貢献機

能の充実—「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点形成」、および鹿児島大学重点領域研究環境（生物多様性プロジェクト）学長裁量経費「奄美群島における生態系保全研究の推進」の援助を受けた。

■ 引用文献

- 赤崎正人. 1984. セダカタカサゴ. Pp. 163–164, pl. 155. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫（編）. 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- Allen, G. R. 1985. FAO species catalogue. Vol. 6. Snappers of the world. An annotated and illustrated catalogue of lutjanid species known to date. FAO Fisheries Synopsis, No. 6 (125): i–vi + 1–208.
- 新垣柴太郎・吉野哲夫. 1984. 沖縄釣魚図鑑. 申請図書出版, 那覇. 191 pp.
- 具志堅宗弘. 1972. 原色 沖縄の魚. 琉球水産教会事務局, 那覇. 247 pp.
- 岩槻幸雄・上林大輔・三國清士・吉野哲夫. 2004. チカメタカサゴ *Pinjalo pinjalo* の日本水域からの初記録. 日本魚類学雑誌, 51 (2): 163–167.
- 金城清昭・仲本光男. 1995. 石垣島から得られた *Pinjalo pinjalo* の稚魚. 1995 年度日本魚類学会年会講演要旨, p. 39.
- 久新健一郎・尼岡邦夫・中谷一宏・井田齊・谷野保夫・千田哲資. 1982. 南シナ海の魚類. 海洋水産資源開発センター, 東京. 333 pp.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- Randall, J. E., Allen, G. R. and Anderson, Jr. W. D. 1987. Revision of the Indo-Pacific lutjanid genus *Pinjalo*, with description of a new species. *Indo-Pacific Fishes*, 14: 1–17, pl. 1.
- Randall, J. E. and Lim. K. K. P. 2000. A checklist of the fishes of the South China Sea. *The Raffles Bulletin of Zoology, Supplements*, 8: 569–667.
- 島田和彦. 2013. フェダイ科. Pp. 913–930, 2001–2004. 中坊徹次（編）. 日本産魚類検索 全種の同定, 第三版. 東海大学出版会, 秦野.